

ダンネマンのことども

加藤 正

故ダンネマン教授の相続者アメリカ・ダンネマン嬢に教授の経歴についてお尋ねしておいたところ、昨年六月ちようど独ソ戦の始まる数日前にそれが到着した。もう少しのことで貰えなくなるところを、まずよかつたと胸をなで下した。左にかいつまんで御紹介に及ぼう。いづれ第九卷「ダンネマン著、加藤正・安田徳太郎訳『大自然科学史』」には全訳を掲げるつもりだが。

ダンネマンは一八五九年にブレーメンに生まれた。家は代々船乗りであつた。

ハイデルベルク、ベルリン、ハレの各大学に学び、自然科学のすべての部門と史学について教員資格の国家試験を取つた。これは科学を統一体として把握する下地をつくるためであつた。彼の先生の中には哲学のクノー・フィツシャーやエルドマン、物理のヘルムホルツ、化学のブンゼンやホーフマン、植物のクラウス等が居た。

やがてヴッパータール・バルメンの職業学校の化学の先生（後に校長）となり、自然科学教授法の改革に奮闘し、ドイツで始めて生徒自ら実験して自分で結果を見つけるように指導した草分けの一人であつた。『実習的発見的基礎に立つ自然科学指導』等の実習教科書はその所産である。

先生としての仕事のほかに、早くから自然科学史の特殊研究や資料研究に従い、手はじめに『吾々の世界像はどうして出来たか』の小著やゲーリケの『真空について』をラテン語から翻訳した後、一八九六年に『大科学者の著

『作抄』を出し、更に一年おいて『自然科学史入門』を著して、始めてこの歴史の概観を与えた。

更に彼はドイツ各地、ロンドン、パリ、ローマの図書館を訪れて根本資料の研究を積んだが、彼自身も何千巻という専門文献を集めていた（後にその一部がミュンヘンのドイツ博物館に移された）。彼はまた諸国を旅行して知識を深めた。ギリシア、エジプト、西南アジアの古代文化、これら諸国やイタリア、スペイン、フランス、オランダ、スカンジナビア、イギリス、北アメリカの政治経済、学芸文化、自然界を彼は具つさに観察した。

一九一〇年から一四年の間に旧著を拡大増補して『発展と関聯から見た自然科学』つまりわが『大自然科学史』の初版を出した。一九二一年に恩給がついて退職するとともに全然素志に没頭して、科学を統一的に展げて見せること、科学を哲学と結合することに努力した。その間前著を改訂し簡単な撮要本を出し（山田坂仁君の訳が『自然科学史入門』という題で慶応書房から出ている）またドイツ博物館の幹事として活動し、叢書『発明と発見の生成』を監修した。

一九二三年に彼はボン大学に招聘され、始め講師、後に教授として自然科学史を講じた。彼は非常な熱意でこの仕事に献身しつつ、一九三六年に他界した。彼の念願は史学の一要素、専門研究の補充としての自然科学史の研究の発達、人道主義的立場からの文化史の普及にあつた。自分の仕事に献身的に打ち込むことのほかに、彼の性格には考え方にも行動の上にも正義感と純真無垢な気持が現れていた。

（ダンネマン著、加藤正・安田徳太郎訳『大自然科学史』第五巻月報所収）

- 『加藤正著作集』第二巻（「加藤正著作集」刊行委員会、一九九〇年一二月）所収。
- PDF化するにあたり、旧漢字は新漢字に、旧仮名遣いは新仮名遣いに改めた。
- 読みやすさのために、適宜振り仮名をつけた。
- PDF化には $\text{L}^{\text{A}}\text{T}_{\text{E}}\text{X}_{2\epsilon}$ でタイプセッティングを行い、 $\text{dvi} \rightarrow \text{pdf} \rightarrow \text{m} \rightarrow \text{x}$ を使用した。

科学の古典文献の電子図書館「科学図書館」

<http://www.cam.ac.uk/~hi-ho.ne.jp/munehiro/sciencelib.html>

「科学図書館」に新しく収録した文献の案内、その他「科学図書館」に関する意見などは、「科学図書館掲示板」

<http://6325.teacup.com/munehiroumeda/bbs>

を御覧いただくか、書き込みください。